

イタリアを訪ねて

!! 佐藤 利美 (東京都/センター事業団東京北部事業所)

小豆沢病院現場の組合員が開いた「感謝の集い」の席で芹沢先生とみんなでイタリアに行こうという話が持ち上がったのは今年の7月だったと思う。縁あって9名のグループ旅行が実現し、先生の紹介で現地の案内を佐藤三子さんに引き受けてもらうことができたのは私たち一行にとって、大変に幸運な事だった。計画は当初イタリアに行って「人民の家」で酒を飲もうというプランはあったが、全体としてはじめてイタリアに行く人が多いので観光を中心としてイタリア人の生活を楽しんでいるその姿にふれてこようということだった。イタリアは国としてみた時には大赤字の国だが、国民は一人一人したたかに生活をエンジョイして豊かであると感じていたのと、特に中部イタリアの地方での革新勢力の支持のされかたに、その根っこに何があるのか興味があったというのがイタリアに行ってみたいと思う動機であった。

しかし12月15日～23日と日程が決まり、三子さんとの出会いがあってから、だんだんと欲が出てきて現地で労働者生産協同組合の人たちと交流したいと内容的にも、清掃、社会的協同組合、若者が中心となって運営している協同組合、農業分野を担う協同組合とセッティングしてほしいと申し出、いずれにしても現地で5～6日の日程の中で欲ばりすぎても成果が望めないこと、視察を中心とした訪問の時にも進言しているが、机上で交流しても短時間では表面的なことよりつつこんだ討議はできないし、それより彼らが生まれ育った環境である、歴史的建造物や芸術的作品の数々にかこまれて生活している文化の中に、人々のほこりを生みだすアイデンティティを構成している、それにふれる観光は大変重要とアドバイスを受けて、最終的プランニングにたどりついた。ミラノでレオナルド・ダビンチの最後の晩餐と向かい合

ドウオモヤオペラの殿堂スカラ座を観て、ポロニーヤで町中をつなぐ回廊の下を歩きまわり、市庁舎の前に張られたレジスタンスの勇姿の面々をあおいだ。フィレンツェでミケランジェロの丘から街の美しさにためいきをついた。美術館でラファエロやボッティチェリに出会い、ローマではその象徴コロッセオにためいきをついた。その辺の話はまたどこかでつぶやくこともあると思うが、古代ローマ帝国の遺産が今もいきづき中世ルネッサンスの人間回帰の思想を身体中に感じながら、そこに生活の営まれている国、イタリアは興味がつきず芹沢先生のように何度となくおとずれたいと思わせるに充分すぎた。

今回この紙面では訪問した三つの協同組合について私のノートした範囲のことについて報告したいと思う。

イタリアの協同組合は1900年代の最初の時期に中部イタリアを中心に最初の労働者の社会主義思想が生まれ、大地で働く労働者が運河を作り自分たちの生産物を擁護する活動を開始し、最初のレーガが生まれた。こうした活動が労働組合の誕生にもつながった。そしてこの時期に「人民の家」が生まれ、労働者の相互扶助を目指す組織が生まれ、生協が生まれ、同時に肉體労働者の協同組合ないしは連帯組織が生まれてきた。生産協同組合もその時期に生まれている。(1989年12月号仕事の発見誌より)日本と違って一世紀の歴史をもっていて社会全体の重要な構成要素になっている。小売業組合などのカテゴリーごとに10種類あり、その全体をまとめるのは最大のものがレーガであり、その他に2つの全国組織がある。私企業が労働者をもうけの対象として法外な価格を設定しない為の市場の価格設定のバロメーターの役割を果たしている。また自分たちの組織に対しては競争

に打ち勝てる体力をつけるために、保護しない政策をとり、自己変革を課題としている。組合員の協同組合への参加の意識は、最大の消費生協の市場調査の結果からうかがえるのは多少商品価格が高くても「安心安全」を求めている。イタリアの国は大赤字で'96年にECが統一貨幣へ移行する状況もあり赤字の解消に必死であり、地方自治体への予算は削減の方向にあり、サービスは自己負担との考え方が入りつつある。失業率は12%であり、政権は不安定であることなど、三子さんよりレクチャーを受けることとなった。彼女はローマ在住14年、日本では日赤看護学校に学び助産婦の免許を取得しながらも、単身渡伊、日本とイタリアの比較文化をテーマとしている、卒業をひかえたローマ大学の学生である。我が連合会本部国際部の加藤氏とも旧知の間柄との事。

12月18日はじめに訪ねたのはポローニヤのマヌテンコープでした。人民の家の責任者であるガブリエル氏が案内をしてくれた。私たちを迎えてく

れたのは人事部長のバッシーニ氏とツンニョーリ氏である。1938年鉄道の手車清掃の協同組合としてスタート。60年代になってサービス部門に発展拡大、自分たちの将来をつくっていく。80年代に入ってエコロジーの分野へも進出していく。現在は大きく分けて①衛生、②建設、③エネルギー、④エコロジーの分野の仕事をしている。総会で18人の評議員を選出し互選で会長を選出している。

①衛生部門

最も組合員の多い分野。私企業の参入の多い脱税行為の多い中でコストが競争で低くなっている。経済の悪化の中での発展は注目される。

②建設部門

イタリア全体では危機的状況にある。マヌテンコープでは歴史的財産の補修など特殊な技術をもって発展につなげている。

③エネルギー部門

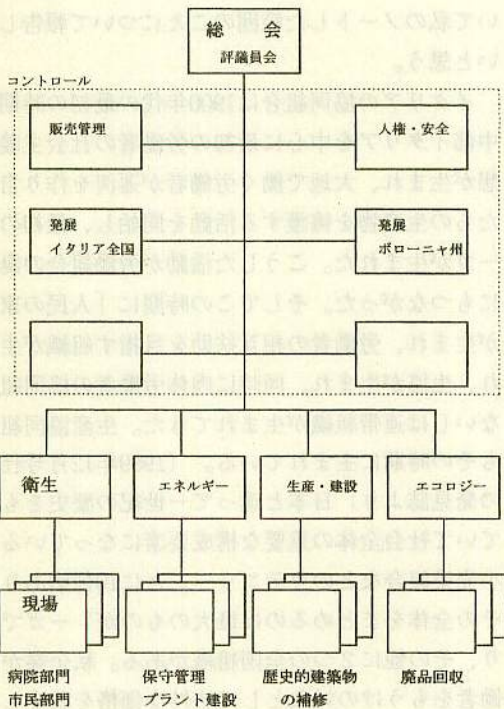
プラントの保守管理からスタートし、建設も含めた発展に。95年からはイタリア全体へ活動を広げている。

④エコロジー部門

90年に誕生。めざましい発展の分野である。現在は三番目の事業高だが、来年度は衛生部門につぐ二番目に成立する見通し。最近では小さな都市は廃品の回収等外注化の傾向にある。

組合員になるための出資金は92年に200万（14万円）リラから1500万（105万円）リラに変更となっていて、95%の組合員化率が20%に下がっている。また就労しないで出資のみに参加する財政組合員の制度がある。労働協約で働く労働者もいる。出資金が高くなった事の是非はまだ解答が出ていないが、清掃労働者のように失業者が一時避難的にここに来て仕事をするが、すぐ次の仕事に移っていくので、金がなくても働ける条件をつくった。また組合員参加を強めるための意識や教育の徹底をはかる目的もあった。協同の責任が裏目に出て無責任になるのが問題だった。

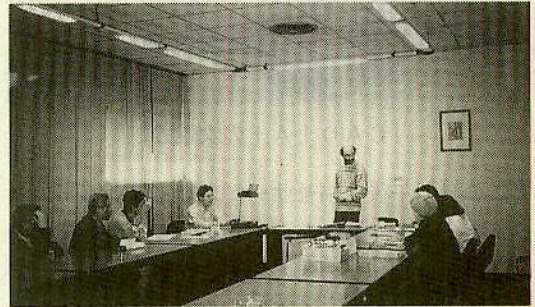
現段階では「有毒な物質は使わない。エネルギーの再利用。騒音防止。歴史的建物の保存。」のキャンペーンを社会に問うと同時に、経営資産の内



マヌテンコープ組織図

容を内外に公開している。社会共同資産として認知を受けることが目的。以下質疑応答の内容です。・病院清掃の現在のテーマは？「1990年までは病院職員がやっていた。以後外注化が進んでいる。自分自身の安全、利用者の安全のための複雑でむずかしい問題が数々ある。」・若者は入ってくるか？「各年齢層同じレベルで占めている。」男37%女63%、イタリア人95%外国人5%・組合員教育は？「1994年の記録では136時間」・組合員の参加は？「年2回の総会にむけて仕事場において20~25回の会議を持って総会に参加する。」三子さんいわく、大変に日本的感覚の質問でむずかしいといわれながら、最後にした質問は・協同組合人としての夢は？パッシーニ氏「一人の組合員の重要性が増した。働く環境が安定して保証される

ことが私の役目と思っている。」ツンニューリ氏「働いている2160人の人が組合員になってくれること。総会には466人の組合員中150人が参加しているが全員が出席してくれること。」ここでも全組合員経営と参加が中心テーマとなっていることに共感を覚えた。

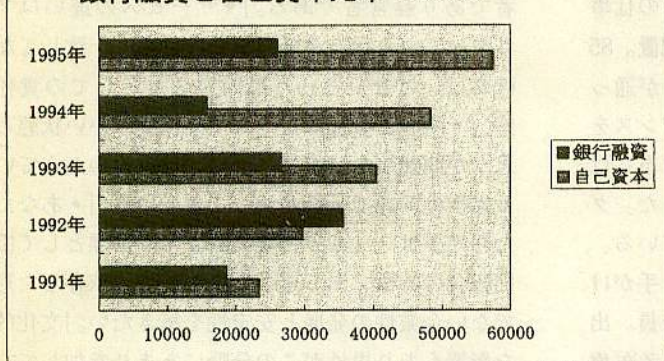


マヌテンコープ事業高

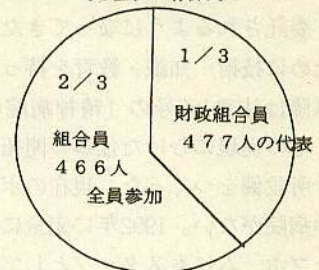
単位 (ミリオン)

	職員数(人)	事業高	純利益	衛生	エネルギー	建設	エコロジー
1991年	1214	83,655	8,083	37,591	15,672	25,883	4,189
アップ率		22.80%		21.10%	11.50%	79.10%	12.90%
1992年	1467	103,632	6,392	44,166	17,189	33,297	8,229
アップ率		23.90%		17.50%	9.70%	28.60%	96.40%
1993年	1500	112,784	7,818	48,619	17,331	33,007	12,288
アップ率		8.80%		10.10%	0.80%	-0.90%	49.30%
1994年	1536	125,737	6,955	49,385	19,894	33,073	20,514
アップ率		11.50%		1.60%	14.80%	0.20%	66.90%
1995年	2160	150,994	9,984	56,655	27,821	38,467	27,184
アップ率		20.10%		14.70%	39.80%	16.30%	32.50%

銀行融資と自己資本比率 (ミリオン)



総会の構成



- ①組合員1人1票制
- ②財政組合員はオブザーバー参加



CADIAIの女性と

この日の午後、福祉サービスを業務としているCADIAIを訪ねた。それにしても古い建物の内部のインテリアの何とステキな事、階段を上るとき映画のワンシーンを思い出していた。ホームヘルパーの責任者のアンナ・マリアさん、保険の責任者のロレーナ・ロフィーさん、教育の責任者のリタ・ゲリーリさん、保護ハウスの責任者のピオレッタ・ガブリエルさん（美しい4人のキャリアウーマンにむかえられた）。1975年11月に病院介護のヘルパーである女性によって設立された。病院のお年寄りの介護、リビアの子どもの介護、76年市の委任で家庭訪問開始、81年市町村との健康ユニットとの提携、84年40人のオペレーターでボローニヤ全体のヘルパーを司る。周辺にも広がる。83年以降は子どもやハンデキャップ（身体的・精神的）のある人、みなしごの保護、孤児院に変わるレジデンスの運営、など多技に渡る。

老人むけに地域を広げ、そのあとで分野を広げ、人材を送ってきたが、今は総合管理を自治体より委託されるようになってきた。それらの仕事のために技術・知識・教育を持った人を配置。85年以降は法律180号の〔精神病院の廃止〕が通って、その実現にむけた仕事の開拓。レジデンスを2ヶ所設備をつくった。現在のボローニヤ市には精神病院がない。1992年に完全に失くなった。グループホームにもスタッフとして関わっている。現在は麻薬患者を対象としたプログラムを手がけている。組合員は現在376名で95%が組合員。出資金は200万リラ（14万円位）、1981年に医者医療

関係者の協同組合が出来て①労働医学、②労働によるリハビリについての研究が進んだ。それを受けて、91年以降労働医学へ進出した。健康診断、労働環境調査、労働安全、リハビリ、デイセラピーは朝来て夕方帰る。

総合的な福祉サービスの分野を担う発展を続けているカディアIの設立当初の組合員はどういう思いでこの困難をきりぬけてきたのか？

軌道に乗るまでの苦労は主婦がやるということと専門性を問われた事だった。しかし経済的理由とともに左翼的理想としての実現への思いがその苦労を支えた。当時、医者、看護婦など専門家以外の周辺の仕事が大事であるという社会的コンセンサスがなかったことと、主婦が年寄りの面倒を見るのはあたり前との風潮の中で活動の資金を生み出すことは大変な苦労だった。

そこで①どういう仕事をするか特徴を明確にする、②行政に働きかける、③教育部門を置いて専門性を高め重視する、④協同組合のヘルパーは、初め9ヶ月間学校で450時間の講義と450時間の実技を受ける。（900時間）現在は1200時間に増えている。さらにその上に経験者講習は300時間の講義と100時間の実技を受ける。このように専門性を高めて、専門職として確立し正当な評価の給料をもらえるようにすることが目標である。（教育者の場合は3年間学校に通って免許を取る。）以下は質疑応答の内容である。

・公共や民間との比較において自分たちの仕事の自負は？「①組合員同志の相互扶助、②社会的目標として生活の質を高めるような価値、③労働者であり経営者である。」・サービスの違いは？「やっている行為が協同組合の目標と一致してなければいけないという協同組合員としての責任感。」・組合員参加はどうか？「かなりいい状態と思うが問題がない訳ではない。行政のかかえている赤字の問題で予算が減ってきている。」・あなたたちの夢は？「もっと現実的です。目標として協同組合の特徴である連帯を生かして、依存した形でない企業性の発展と安定性を築きたい。」文化的な影響もあり男性がこの分野にあまり参加してな

く1割程度で、あとは平均して30歳～33歳くらいの女性でやっている。若い人が大学卒業して入ってくるという点では雇用をつくり出している。彼女たちの協同組合人としてのまじめさにうなずきながら交流場所より外へ出た。開口一番、田中羊子さん、芹沢夫人、私の3名が同時に口にしたこと。「4人とも靴がすごくかっこよかったね。」スラリとびた足にはきごごちの良さそうな質の良い靴がやたら印象に残っていた。さすが本場である。そのせいか、3人とも靴を買って帰ってきたのである。

1日置いた20日フィレンツェのトスカーナ地方のレーガ本部を訪ねる。きょうはサービスの協同組合であるラッツについて交流する。インフルエンザでラッツの予定の人が来れず、本部のアントニオ・ケッリ氏が対応してくれた。ラッツはマステンコープと同じように、1946年鉄道車輛の清掃をする協同組合としてスタートした。戦後の雇用政策として生まれた。94年の年間事業高は700億リラで仕事のセクションは①工業、②市民、③病院～の清掃、④ポーター、⑤造園（緑）、⑥ゴミ、⑦毒物処理、⑧観光資源の管理、ホテルの運営⑨航空写真、⑩麻薬患者の更生などである。

現在がかかえている問題は公共の入札で業者が安い労働力で入ってきて勝つことがむずかしいこと。ポーロニヤ、フィレンツェ北部イタリアの協同組合は会議を持って競合しない努力をしている。出資金は400万リラ（28万円）ウニコープ（消

費生協）では20,000リラ（1,400万円）ぐらいだが、ワーカーズコープの考え方は違う。一定の出資金は労協として当り前の政策だと思う。法律においてはワーカーズコープの出資金を50万リラ以上（35,000円位）～1億2000万リラ（8,400万円位）の範囲で規定している。資本があまりなかったため貨車の仕事がへってくるなかで競争の少なかつた分野へ進出した。協同組合は投資する資本がないのが弱点であるが、手は多くある。協同組合の資金調達は①組合債、②利益の不分配、③銀行、④ジマスティフォンド（単協が利益の3%をレーガに集めて基金としている。）があり、新しい仕事おこしにはジェスティフォンドが利用できる。ラッツは医療レジデンスの建設にあたって利用している。最後に他の2つの協同組合と同じように組合員参加についてたずねる。

①出資、②講座があるが、イタリア全体的にみて、幹部の部分での問題はあがあるが、一般の組合員のレベルではやれていない。協同組合という存在がトスカーナ州でもエミリア・ロマーニャ州でもきわめて一般的で経営の部門はその専門家が配置され戦略を考えているので、トータル・クオリティーということでは日本の組合員参加の水準にはないと思う。まだまだ課題はあると考えている。とアントニオ氏は答え「私も日本にそれらを学びに行きたいと思っている。」と結んだ。

今回訪問したのは三つの協同組合だし現場の組合員と交流するところまでは及ばなかったが、あらためて「協同組合人」の誠実さやまじめさに国を越えて連帯しあえる仲間との思いを強くした。



レーガ本部にて